

ポスターNo. 13

地域における外国人児童生徒への日本語学習支援者養成研修

—AGA 子ども教室の設立に向けて—

三好大（東京学芸大学大学院生）・工藤聖子（早稲田文化館日本語科）

実施機関	上尾市協働のまちづくり推進事業「AGA 子ども教室プロジェクト」
授業名・研修名	外国人の子ども日本語学習支援指導者入門講座
対象（人数等）	上尾市の放課後の学習支援教室で指導者になることを希望する人（述べ 201 名）
授業・研修の 目標	指導者になるために必要な基礎的な知識とスキルを習得して、外国人の子どもへの日本語学習者に関わろうとする人や「AGA 子ども教室」の設立・運営に携わる人を養成する。
参考にしたモデルプログラムの番号	①・⑥・⑩・⑪・⑫・⑬・⑰・⑱・⑲

<実施状況と成果>

①授業・研修等の実施計画

本発表では、埼玉県上尾市における外国人児童生徒への放課後の学習支援教室設置に向け、日本語学習支援者を養成する目的とした研修について報告する。上尾市では、外国人児童生徒の増加に伴い、上尾市国際交流協会（AGA）と協働で日本語学習支援体制の構築を課題とした事業を立ち上げた。本研修はその依頼を受けたものである。2018年7月から11月まで毎月1回（3時間×5回）で実施した。参加者は述べ201名で、成人対象の日本語教師・日本語教育のボランティアの経験者や、教員、外国人児童生徒への日本語指導員の参加があった。全5回の研修は継続参加もその回のみでの参加も認められる形式であった。講師としては、外国人児童生徒教育への教育・支援経験のある大学・高校教員、大学院生など合計7名で連携し実施した。依頼内容をもとに、メンバーによる協議を経て、①外国人児童生徒らへの言語文化的背景への理解、②基礎的な日本語指導の方法、③日本語と教科学習を統合した支援方法の3点に焦点を絞った。その後、概要(表1)のように研修を展開し、モデルプログラムを参照して各回の実施内容を具体化した。各回では、講義やグループワークなどの複数の活動を組み合わせて構成した。

表1 研修の概要（カッコ内数は参加者数、丸囲み数字は参照したモデルプログラムの番号）。

回	テーマ	研修の目標	主な活動
1 (41)	「子どもの日本語学習支援」の現状と課題を知る ①⑥⑬	上尾市の外国人の子ども達の現状と課題を知り、日本語支援を通して課題の解決にどのように貢献できるか見通しを持つことができる。	・上尾市の現状に関する情報共有 ・外国人児童生徒教育の概要に関する講義と事例紹介
2 (39)	文化間移動をする子ども達の発達と学習過程 ⑩⑪⑫	外国人の子ども達の適応と心のケアのため、子ども達の自己肯定感を支えることの重要性を知る。	・言語習得に関わる認知発達、アイデンティティ形成についての事例紹介
3 (45)	日本語学習支援の方法—初期段階の学習支援	初期段階の日本語学習支援の概要を知り、具体的な場面に即した文型指	・初期文型指導の方法—パターンプラクティスのペ

	⑰⑱⑲	導の計画を立てることができる。	アワーク
4 (42)	日本語学習支援の方法 ー初期段階の学習を終 えた子どもへの学習支 援⑰⑱⑲	インタビューやロールプレイなどの 活動を体験し、発話を引き出せるよ うに活動を展開できる。	・グループでの模擬的活動 ーサイコロを用いた自己紹介 ー夏休みの経験についてのイ ンタビュー など
5 (34)	日本語を生活と教科学 習に結ぶ支援 ⑬⑰⑱	日本語と教科を統合した統合した指 導方法を知り、日本語力に合わせて 活動を展開できる。	・リライト教材作成 ・数学の指導・キャリア形成 に関する講義 など

②実施時の受講者の参加の様子

各回終了時に行った研修内容へのアンケートを中心に報告する。まず、5段階で評価した各活動への満足度は、全て3.6を超え概ね満足という結果であった(表2)。

次に参加者の記述回答部分について紹介する。まず、本研修に参加して、上尾市の現状や全国の日本語支援体制について知ることが出来たという記述が見られた(第1回)。また、具体的な支援方法の講座(第3～5回)後では、「スモールステップで学習を進める」「子どもの置かれた状況、能力等を実際の活動にいかん反映させる」「言わされる日本語から何を言いたいのかの日本語へ」という視点が指導全体に対しても重要であると述べられていた。また教科支援では「苦手な教科(数学)の支援はできないと思っていたが、私もできる支援があることを知った」との記述もあった。さらに、言語習得と発達(第2回)やキャリア形成(第5回)に関する講義では、「言語学習には長い道のりが必要、教師も根気強くつき合わなければならない」といった長期的な視点への気づきや、「自ら学ぶ姿勢のない子供を否定的に見ていたが、日本にきた背景、年齢、心情など多角的に見つめていく事が大切」と参加者の見方の変化が見られた。一方で、指導経験がない参加者からは、教科支援は「学校の教師並みに(教科書を)読み込まないと指導するのは困難」と懸念を抱く参加者もいた。指導経験のある参加者からは、「もっと多くの具体例をたくさん出してほしかった」という意見や直面する課題も寄せられた。

回	平均値
1	3.67
2	4.41
3	3.76
4	4.06
5	4.23

③成果

具体的な方法を学ぶ中で、日本での学校生活や社会生活に適応する支援の際に、子どもの実態や課題に寄り添うことや長期的な視点に立って支援を行うことの重要性が十分に認識されていた。この視点は、校種を超えて支援できる地域の特性を生かした支援体制の構築のために活かすことが望まれる。

④課題

参加者が毎回入れ替わり、背景も多様であり、事前にニーズを十分に把握することが困難であった。加えて、グループワークに不慣れな参加者も多かったが、その意義を伝え活動を繰り返すことで回を追うごとに積極的に参加する様子が見られた。また、モデルプログラムについては、言語文化的背景の理解の部分では活用できたが、教科と統合した日本語指導に関しては、研修の内容に関して具体的な例の充実が求められるという意見が講師から挙げられた。

付記：本研修は発表者らに加え、池上摩希子(早稲田大学)、齋藤ひろみ・菅原雅枝(東京学芸大学)、川上さくら(啓明学園高等学校)・秋山幸(早稲田大学大学院生)の7名で企画、運営を行った。